ほしをつかむ

栞

ほしをつかむ

　透明な言葉をぽろぽろ零して、夢見がちなきみは手のひらに星をみつけた。しあわせそうな目尻が、まだまだ若いおんなの子のはずなのに、目尻が、くしゃりと大きな波をつくる。
　蛍はもうみんないなくなってしまったし、淀んだ七月の夜空には明かりは少ない。それでもぽつり、ぽつりと他の一等星が――その大きさを想像できないくらいにこぢんまりとした状態で――散らばっては地上を覗き込んでいた。きみはまだ、にこにこと両手のひらに包んだ星をみつめている。

　星だよ、ときみはまるい柔らかな声を上げる。そうだね、星だね。ぼくは応える。
　こっそりと雲に隠れていた月がそうっと顔を出し、彼女の額がほんの少しだけ白む。細長い睫毛がまばたきに揺れる。

　湿度の高い空気の中で、その笑顔だけがひんやりとした心地よいつめたさをもっている。彼女の甘い鼻は背が高いわけでなく、ときどきすん、と夏を嗅ぐように動いていた。ショートヘアがこめかみに線をつくっている。

　きみがつかんだ星は、どんな色の、どんな質量のものなのだろう。
　ぼくが視認することのできない不可思議な星を彼女はつかんだままで、開かずに。大切そうに抱えたまま。